

田植えから活着期の水管理

■ 除草剤の散布は適期に、水管理は適切に ■

1. 除草剤散布 □ 圃場条件を確認しながら散布 □

ノビエ等の雑草は代かき終了後から活動し、代かき～田植えの期間も高温で推移するため、成長も早くなります。

■ 除草剤散布時は、田面の高いところが隠れるくらいまでたっぷりを張る。

■ 除草剤散布後5日～7日程度は、湛水状態を保持する。

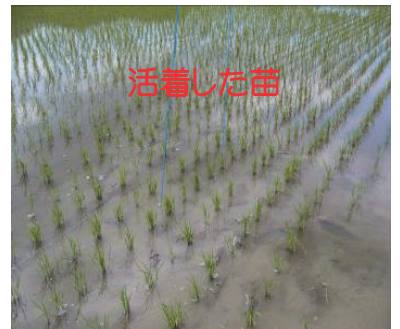
■ 除草剤それぞれの使用時期を確認し、散布適期を逃さず散布しましょう。(散布が遅れると多くの除草剤は効果が低減します。)



2. 水管理 □ 活着後は浅水管理 □

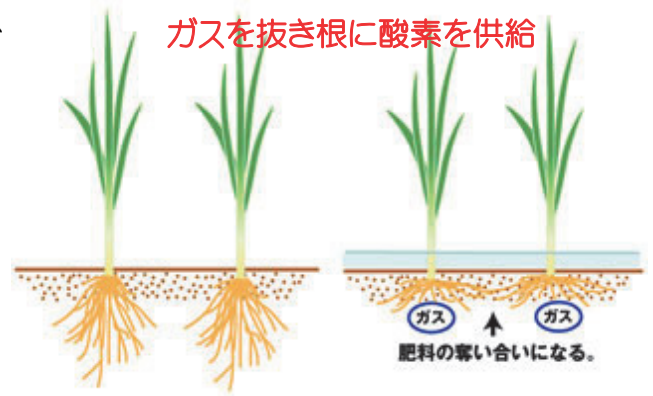
田植え直後、苗が活着するまでは、苗の葉先が少し見えるくらいの深水(3～4cm)を維持し、苗を保護しましょう。

新しい葉が出始めたら、活着し始めているので、2～3cm程度の浅水管理で水温、地温の上昇を図り、分けつを促進し、莖数確保に努めましょう。



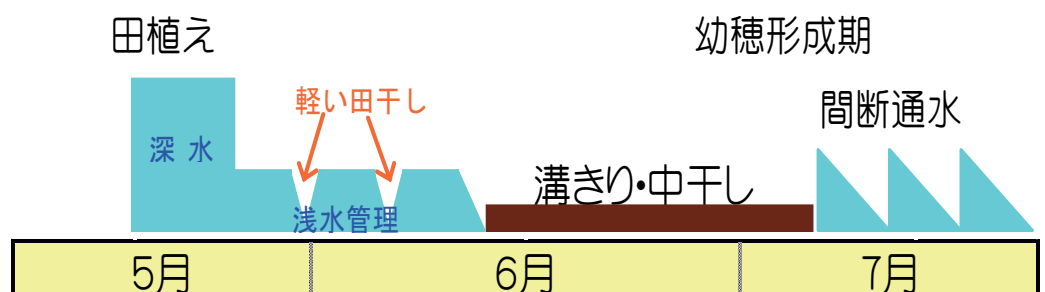
3. 田干し □ 葉色が出ない圃場は、落水して軽く田干し □

この時期、基肥をしっかり入れたはずなのに、葉の色が薄い、葉先が黄色くなっているなどの要因として、土の中にガスが溜まって根の伸長が阻害されていることが考えられます。葉色が薄いからといって、むやみに追肥をせず、軽く田干し(1～2日間落水)を実施しましょう。地表から水が無くなるとガスが抜け、根には酸素が補給されて、根は地中深く伸びるようになります。



活着後の深水管理は、田水温の上昇が遅く分けつが遅れ、軟弱徒長を招きます。コシヒカリは6月中旬まで浅水管理とし、水の入れ替えや軽い田干しで根に酸素を与えましょう。

■ 水管理の目安



溝きり 中干しで健全な稲体を

■ 目標茎数の7～8割、7.5～8葉期を目安に ■

1. 溝きり □ 中干し前に必ず実施 □

中干しを効果的に行うためには、溝の設置は不可欠です。

溝きりは中干し以降の入排水管理を速やかに行うためにも有効です。

具体的には目標茎数の7～8割(コシヒカリ:移植茎数16本/株、直播茎数100本/m)が確保された時点から落水を開始し、土の表面が固まってきたら2.5m～3m(8条～10条)間隔で溝きりを行います。



2. 中干し □ 田植え後25日～30日が開始目安 □

中干しは、土壌を還元状態から酸化状態に切り替え、ガスを除去し根の活力を高めます。また土を硬くして刈り取りなどの作業性を高めます。

中干しが不十分になると茎数・籾数過剰となり、根張りが劣り、倒伏や白未熟粒の発生に繋がります。また、地固めが不十分となり、収穫間際までの間断通水ができなくなります。中干しは田面に小さな亀裂が入り、軽く足跡がつく程度までしっかり干し上げましょう。

稲が大柄になりやすい平坦地では早め・強めの中干しを心がけましょう。また、極端に強すぎる中干しは漏水が多くなるなど、今後の水管理に悪影響を与えるので控えてください。

乾田(浅い田んぼ)では2～3日間の田干しを繰り返し、田面に小さ



な亀裂(ヒビ)が入る程度に干しましょう。人が歩ける硬さ(歩くと1cm沈む程度)まで干すが、大きな亀裂は入れない!

半湿田(深い田んぼ)では4～5日間の田干しを繰り返し、足が少し沈む程度、(足跡にわずかに水がたまる程度)になるまで強めに干し上げましょう。

3. 病害対策 □ 箱施薬剤を散布しなかった方へ □

この時期、高温多湿になるため、いもち病や紋枯病にかかりやすくなります。苗箱施薬(ルーチンエキスパート粒剤)を使用していない移植の場合や、直播の場合は、6月上中旬頃にいもち病予防としてオリゼメート粒剤、7月中旬頃に紋枯病予防としてリンバー粒剤を散布してください。また、補植用の置き苗はいもち病が発生しやすく、葉いもちの伝染源となるので、土中に埋めるなどして早期に圃場から除去しましょう。

